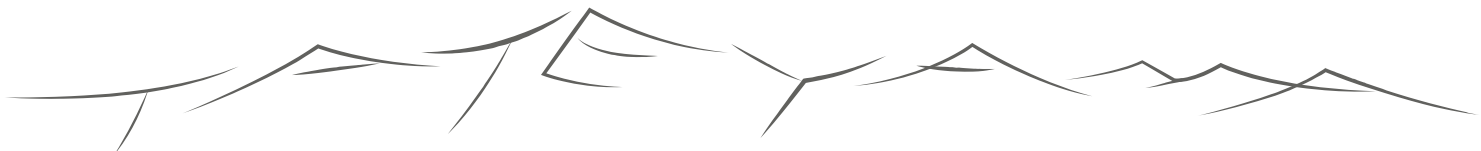


22

Spots of View



海岸から3,000メートル級の山並みが見える場所は、

世界に数カ所しかないと言われています。

海と立山、川と立山など、水辺から望む雄大な立山連峰は、

富山ならではの絶景です。

01

浜黒崎海岸



02

水橋フィッシャリーナ



03

大漁橋



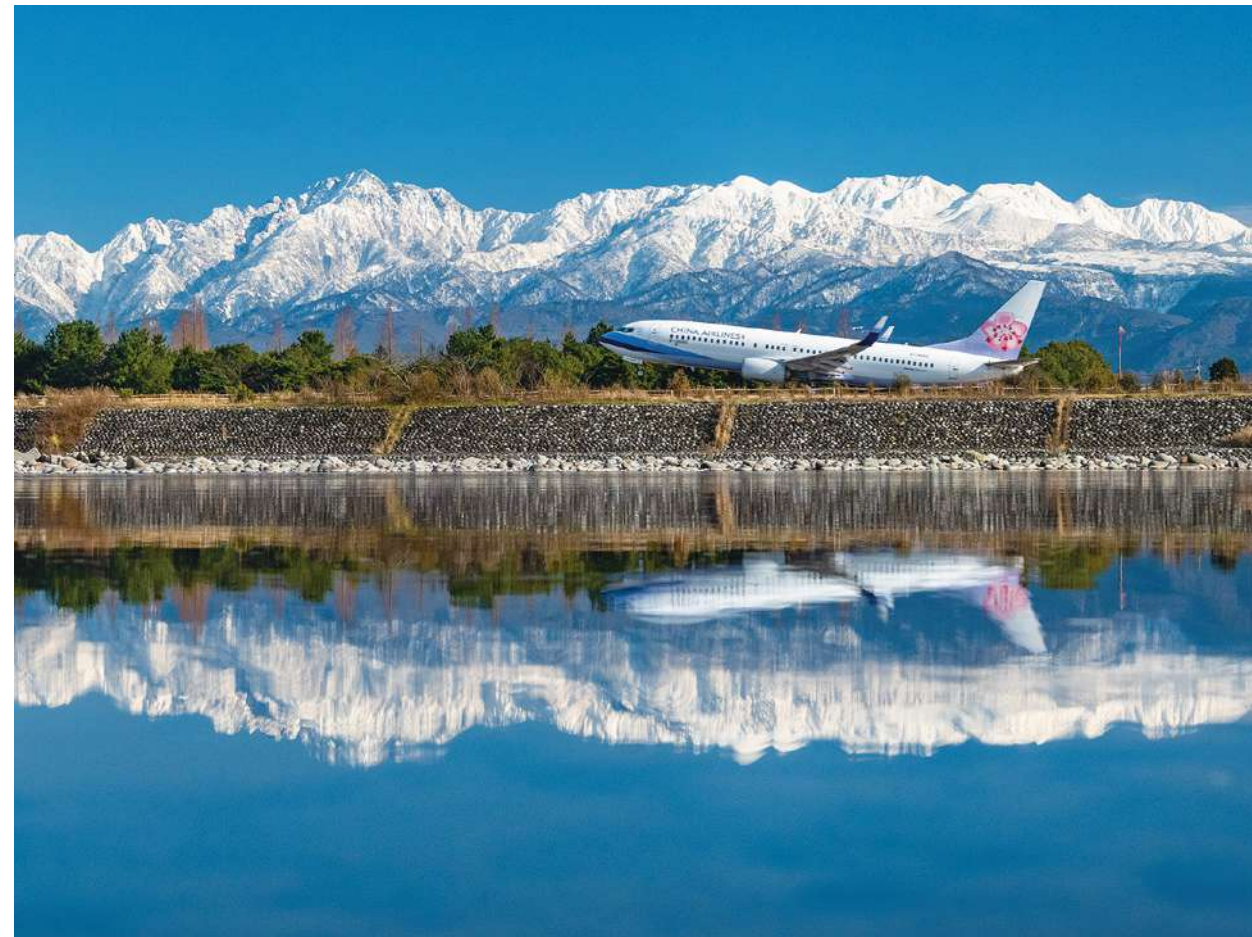
— 04

芳見橋



— 05

白岩川左岸



— 06

神通川緑地



_ 07

富岩運河環水公園天門橋

人びとが集う公園では、

緑の芝生に映える大パノラマが視界いっぱいに広がります。

立山がよく見える休日はちょっと気分もあがって、

思い出のシーンを鮮やかに彩ります。



_ 08

殿様林緑地

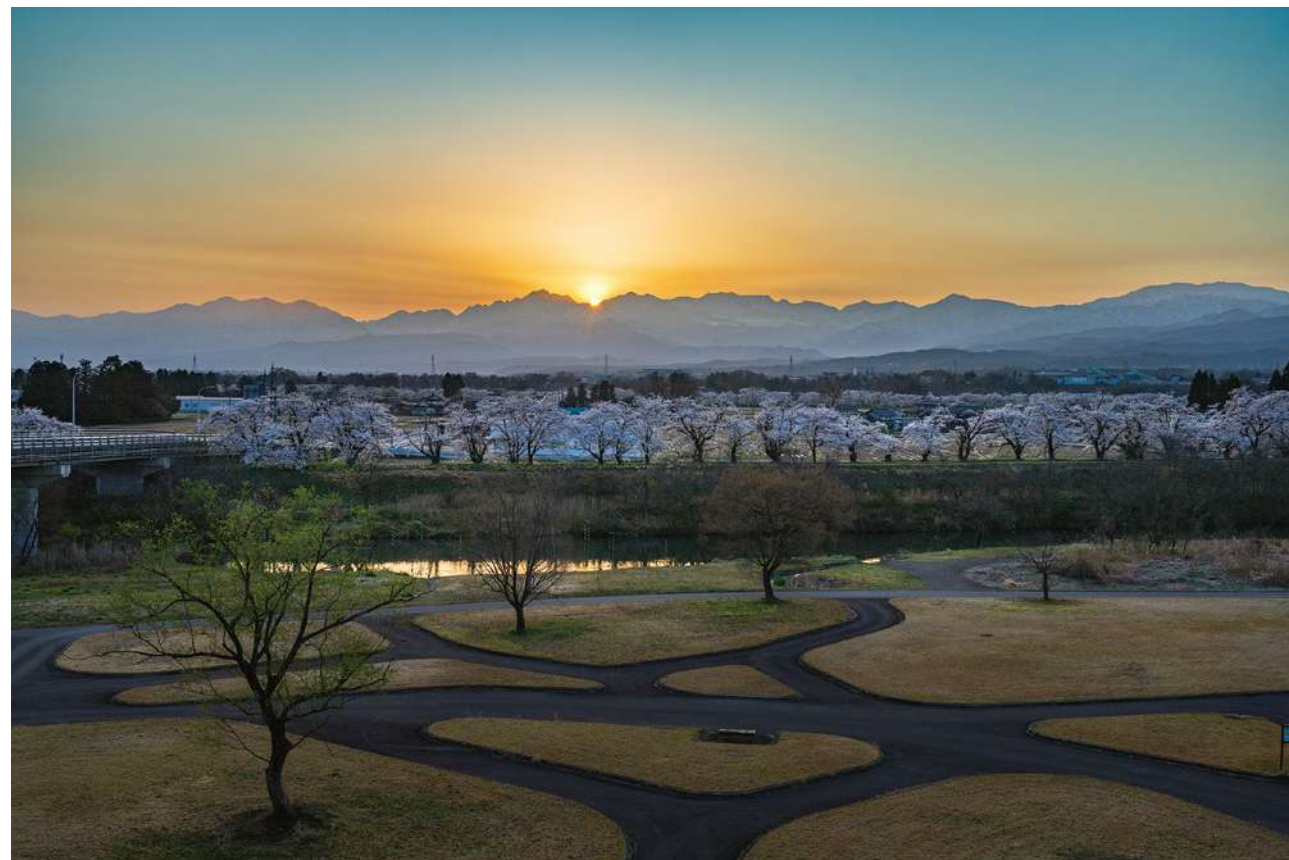


_ 09

岩瀬スポーツ公園

— 10

神通川水辺プラザ



— 11

稲荷公園

市街地の向こうに広がる立山連峰は、

いつも市民を見守るように静かにそびえ立っています。

ビルの間からのぞく立山や通りの向こうに見える剣岳など、

時間と共に変化する姿に見とれます。





— 13

富山大橋



— 14

富山市役所展望塔



— 15

呉羽山丘陵フットパス連絡橋

16

富山きときと空港



17

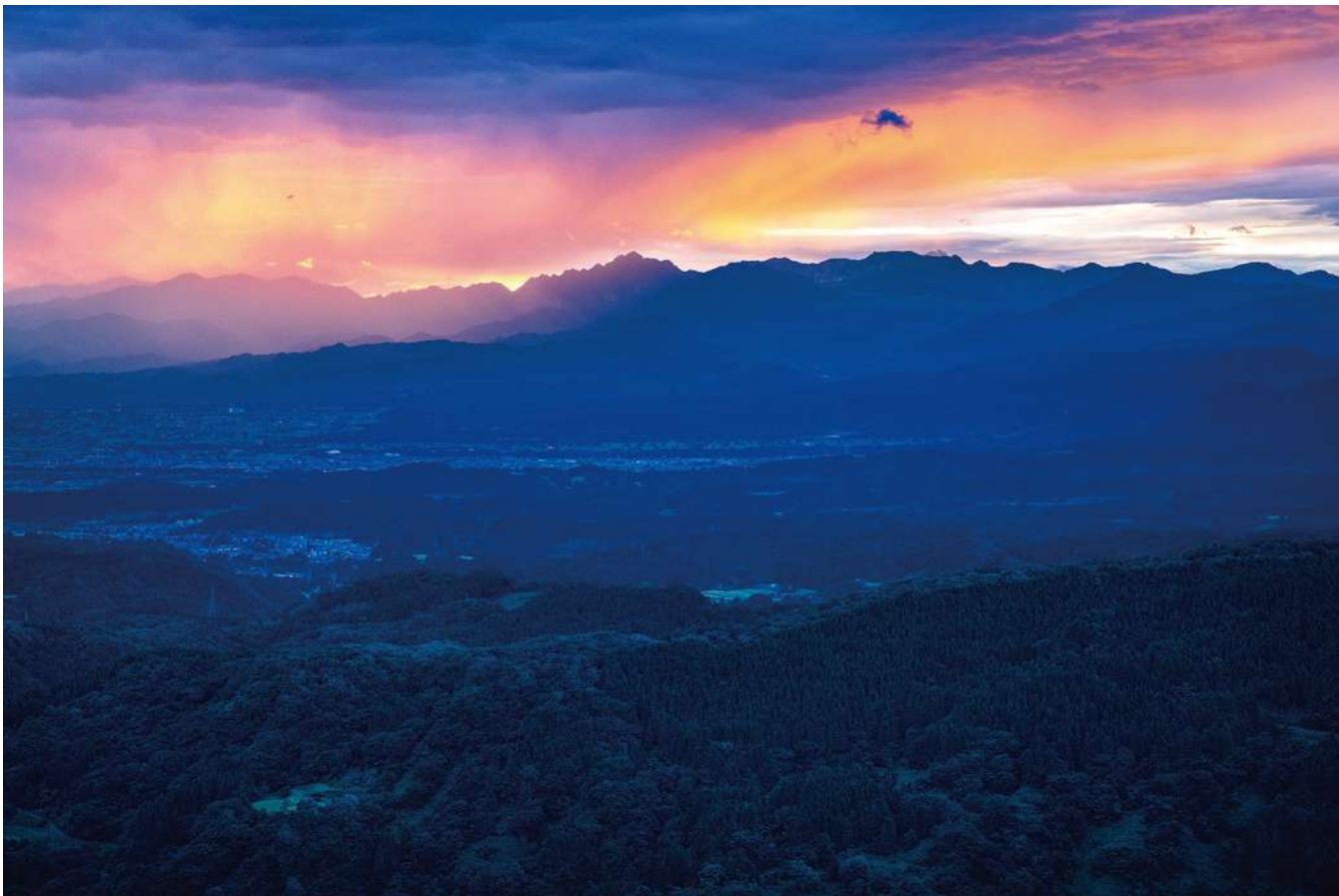
平和通り

富山平野に広がる田園から富山湾を一望する高台まで、
変化に富んだ立山が楽しめます。
桜の遊歩道、新緑、紅葉の山々、雪の平野など、
四季おりおり違う表情で輝いています。

18

大庄地区





— 19

牛岳温泉スキー場



— 20

富山八尾中核工業団地展望台



— 21

富山東パーキング



暮らしの中の立山

富山地方気象台

気象情報官

大江幸治

富山地方気象台気象情報官の大江幸治です。気象情報官は気象台の仕事の内容や発表している情報などをわかりやすく説明することが主な仕事です。

気象台で観測している気象要素のひとつに視程があります。視程は、水平方向に見通しのきく距離のことで、以前は職員が目視により観測していました。現在は視程計という測器で自動的に観測をおこない、その結果はキロメートル単位で記録されます。大気中にちりや水の粒、黄砂などが少ないと遠くまで見通せて視程は良くなりますが、多いと近くまでしか見通せず、視程は悪くなります。

遠くまで見通せるのはどんな時でしょうか。雨や雪が降ったあとは視程が良くなります。これは大気中のちりなどが雨や雪と一緒に落下してしまうためです。ただし、雨や雪が降った直後は、山のふもとは良く見えても山頂付近には雲がかかり全体は見えません。ある程度時間がたてば、山頂まで見えることが多いようです。冬は夏に比べると気温が低く、大気中の水蒸気は少なくなり、天気良ければ見通しは良くなります。しかし、

雨や雪が降っていることが多く、チャンスは限られてきます。

私は氷見市で生まれ育ちました。小学校の正面玄関には立山連峰の写真が山岳名入りで掲げられていました。中学校は自転車通学で、朝ペダルをこぎ学校に近づくと、天気の良い日には遠くに見えたこともありました。実家は山や木々に囲まれていたので立山は見えないと思っていましたが、ある時、屋根に上ると見えることがわかったので、うれしく思いました。就職してからは県外の生活が長く続きましたが、時には遠くに見えた立山を思い出すこともありました。

子供のころ遠くに見えた立山は、今では富山市内から間近に見て生活していますが、雄大さには圧倒されています。秋になると山頂が冠雪し、次第に中腹に広がっていきます。ふもとまで白くなる前に冬支度を済ませなければなりません。冬のあいだ雪が続くと立山は見えなくなりますが、雪がようやく止んで真っ白に見える時は、思わず見入ってしまいます。

特等席からきれいに見えることを祈っております。





立山砂防の価値	 富山の市街地から望む三千メートル級の雄大な立山連峰。ここを源として流れる豊かな水は、私たちのくらしや産業を支えて大きな恵みとなっている。一方、常願寺川上流には「知られざるもうひとつの立山」といわれる立山カルデラがあり、地震や侵食で脆くなった山肌が今も崩れ続けている。ここに、日本三大崩れの一つとして知られる「鷲崩れ」がある。 常願寺川は、立山カルデラが流す岩をも抱えて暴れだし、多くの命を奪ってきた。流域のあちこちにある大転石や記念碑が、かつての災害のすさまじさを物語っている。今でこそ災害が少なく住みやすいと評価される富山の歴史は、実は水や土砂との長い闘いの歴史でもある。 幕末の安政五年(1858年)、飛越地震により立山の大鷲山と小鷲山が崩れ落ちた。直後に現地を調べた山廻りの役人は、立山カルデラ内で、鷲崩れの土砂が川を堰き止め大小の湖ができていると藩に報告した。山二つ分の莫大な量の土砂と水。それが決壊したら?！。 地震から二週間後と二カ月後。二度にわたり、ついに立山カルデラに溜まっていた土砂と水があふれだし、恐ろしい土石流が山津波となって富山平野に襲いかかった。この富山県災害史上最大の「安政の大災害」より、常願寺川は日本有数の暴れ川となり、流域の人々を苦しめた。 明治以降も常願寺川は氾濫を繰り返した。オランダ人のデ・レイケなど多くの治水家を悩ますが、有効な方策が見つからない。根本的な対策は水源地の砂防

しかない。明治39年(1906年)、富山県営の砂防工事が始まり20年続いたが、豪雨のたびに要の砂防堰堤が破壊されてしまう。

大正15年(1926年)、立山砂防は国直轄となり、ヨーロッパの近代砂防を学んで帰国した赤木正雄が責任者に就いた。のちに「日本の砂防の父」と称される赤木は、立山カルデラの出口に築くコンクリート造(づくり)の大規模な白岩砂防堰堤を基幹とする大がかりな計画を立てた。

この白岩砂防堰堤と立山カルデラ内の泥谷砂防堰堤群、中流域の本宮砂防堰堤は、水系一貫の治水対策の礎となるものである。加えて、わが国の治水史上の評価も高いことから、これらを合せて、国は「常願寺川砂防施設」として重要文化財に指定。また、富山県においては、防災と自然環境の再生などの観点から立山砂防の世界遺産登録を推進。このため県は「顕著な普遍的価値」にふさわしい三つの点として、立山砂防は災害の多いわが国で生まれた防災の総合技術であること、常願寺川の水系管理システムは世界の中で近代における到達点にあること、そして、立山砂防は近代的な防災技術の代表的なモデルであることを、世界にアピールしている。

穏やかに見える常願寺川だが、その素顔は暴れ川であることに変わりはない。百年以上続いてきた立山砂防は、富山平野にくらす人々の安心・安全のためにこれからも続くだろう。荒ぶる川を鎮めようと百年の計に携わった人々の気概が「護天涯」の碑に刻みこまれている。

立山信仰1300年の物語

日本人にとって山は、天に最も近く聳え立つ様子から、神の降り立つ場所と考えられてきました。古事記や日本書紀では、天にいる神が山に降りてきて、この日本をつくったと記されています。山は神が地上に降りてくるための道であり、神が住みつく場所だと考えられていました。やがて、信仰の対象となり、富士山や白山そして立山は聖地とされていきます。

「立山に 降り置ける雪を 常夏に見れども飽かず 神からならし」(万葉集四〇〇一)

天平19(747)年4月27日、越中国司大伴家持は、立山を神のすむ山と讃えています。万葉の時代の立山は、神々しい山で、遠くから眺めて拝む山であり、登る山ではありませんでした。

一方、日本人は亡くなった人の魂は山の上の遥か彼方に行くと感じていました。あの世は山の彼方にあり、先祖の霊が山上から子孫を見守っていると信じていたようです。その先祖の霊は、お盆と正月には子孫の近くにやってくるため、お墓参りやお祭りをしました。

そこへ、仏教という外来宗教が日本に伝わってきます。仏教では、生前の行いによって地獄や極楽に行くといわれています。経典では地獄は地面の下にあるのですが、日本人は、あの世は山の向こう側にあると信じていたので、どうもしっくりこなかったようです。多分、日本人の土着的なあの世観に仏教の要素が加わり、仏教的にアレンジされるなか、地獄や極楽は山にあると信じるようになっていったのでしょう。では、だれがそのアレンジをしたのか、それこそが山の宗教者で

ある山伏、修験者だったと考えられています。当時の日本の最果ての地である越中国立山には、地獄谷のすさまじい景観、まさに地獄がありました。

仏教説話集『今昔物語集』には、立山の地獄谷で修行していた僧の前に、地獄に落ちた娘があらわれ、助けを求めた話が書かれています。また「日本国ノ人罪ヲ造テ、多ク此ノ立山ノ地獄ニ墮ツ」と記されているように、立山は地獄の山として都の人々に知られていました。

遠くから拝む山だった靈山が、修行の場として開かれています。山で修行する者は、修験者や山伏と呼ばれましたが、彼らは、靈山で修行すれば、体と魂が清らかに生まれ変わり、験力という超能力を得られると信じていました。やがて、里の人も修験者の案内で靈山に登るようになります。山は、修行によって生まれ変わる場となり、立山にも、日本全国から登拝者がやって来ました。

江戸時代、立山信仰を広めたのが、岩峯寺や芦峯寺の衆徒です。彼らは、立山曼荼羅と称される宗教絵画を立山信仰の布教の道具とし、特に芦峯寺の衆徒は、毎年冬に全国各地を絵解き布教していました。男性には夏の立山参りを、女性には布橋灌頂会の参加をすすめていたようです。全国的な信仰を集め、最盛期には一夏6000人もの人々が登拝したといわれています。

開山縁起によれば、大宝元年(701)佐伯有頼によって開かれた立山。私達が毎日仰ぎ見る立山連峰にはこのように1300年を超える壮大な信仰の物語があったのです。

立山博物館

館長

岡田知己

